

第Ⅱ章 発見の経緯とその後の展開

三瓶埋没林の発見までには、約7年に及ぶ試行錯誤期間があり、苦勞の末発見に至ったものである。発見に至る経緯やその後の展開について、その概要を述べる。

(1) 平成2年

松井整司氏（三瓶埋没林調査保存検討委員会委員、以後「松井氏」と呼ぶ。）が、大田市在住の歴史研究家石村禎久氏と共に、小豆原在住の吾郷忠芳氏から、昭和58年に近所で掘り出された埋もれ杉の写真（写真2-1）を見せられ、大いに興味を持たれる。（この写真は、小豆原地区在住の竹内哲夫氏撮影のもの。）

(2) 平成3年10月

三瓶自然館オープン。三瓶自然館の管理委託を行う三瓶フィールドミュージアム財団の評議員に就任した松井氏から、筆者（佐藤；当時三瓶自然館指導課長）らに写真を見せられる。（現世のスギ林の状況などから、一見して察してこれはかなり古い時代のすごいものであらうと察し、ぜひ一緒に調査をしたい旨を伝える。）

(3) 平成4年度

松井氏が写真の撮影現場や所有者、耕作者などを調べると共に、圃場整備図面などを入手。（耕作者竹内氏より、掘り出した埋もれ杉の破片も入手）

(4) 平成5年度

松井氏が三瓶自然館の協力のもとに、小豆原溪谷部の火砕流堆積物や段丘堆積物などの調査を実施。また、三瓶自然館と共同で各種の聞き取り調査等を実施。これにより、掘り出した業者や他の埋もれ木などの情報を得る。

(5) 平成6年10月

松井氏、埋もれ杉の発見を期待して自費でボーリング調査を実施。5m6本、12.5m1本の計7地点の試錐を行うが、埋もれ杉には当たらず。しかし、埋もれ木を埋積しているものは、火砕流堆積物ではなく、火砕物を含む二次的な堆積物であることを確認。

(6) 平成6年12月6日

三瓶自然館が小豆原地区住民に呼びかけ情報収及び懇談会を開催。これにより、小豆原地区一帯に埋没しているスギの位置など多くの情報を得る。

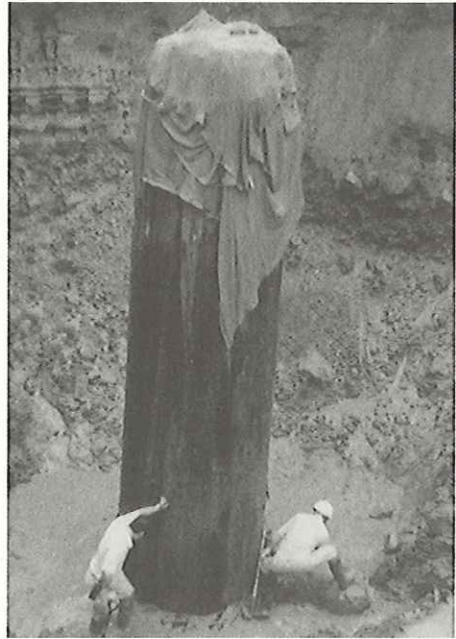


写真2-1 発見のきっかけになった写真。ほ場整備（昭和58年）の際に発見された樹幹

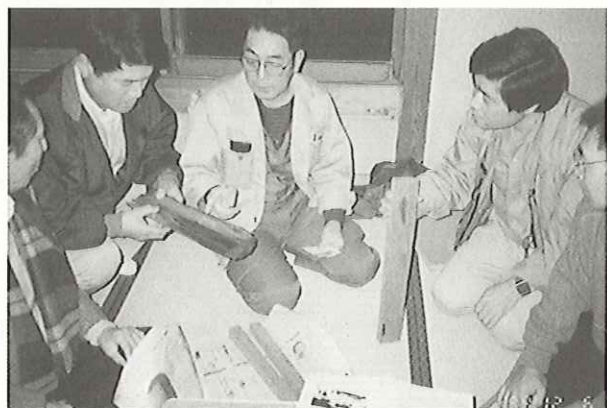


写真2-2 小豆原地区における聞き取り調査

(7) 平成6年12月14～27日

三瓶自然館と松井氏が、以前埋もれ杉が掘り出された水田で重機による試掘を実施。数カ所掘ってみるが、直径20cm程度の倒木が出土するのみで、お目当ての埋もれ杉は発見できず。

(8) 平成7～8年度

景観自然課が、三瓶山自然体験ゾーン拡充整備について検討委員会を設けて検討を実施。この中で、拡充整備する三瓶自然館の展示の目玉の一つに、掘り出した埋もれ杉を使うことを提案。サテライトフィールドミュージアムの発想と併せ報告書に盛り込まれる。

(9) 平成8年11月

三瓶自然館が松井氏の指導のもとに、以前掘り出した埋もれ杉の下部が残っている場所付近のボーリング調査を実施。これにより、基盤までの深度は18.3mであることが判明。併せ、根株を含むかなりの部分が切り残され、残存していることも判明。

(10) 平成9年11月

川崎地質(株)が、埋没予想水田で地中レーダー探査を実施。これは、埋没林調査に関する相談を景観自然課から受けた同社が、可能性を確認するため自主的に行った調査。これにより基盤調査の有効性等が確認される。

(11) 平成10年10月

景観自然課が、埋もれ杉の探査費用を予算化し、予備調査に着手。

(12) 平成10年11月

景観自然課が川崎地質(株)に調査委託をし、地中レーダー探査を実施。反応があった場所を試掘するが、埋没木は発見できず。また、これに併せ、一部水田において表土をはぎ取り掘り出し調査を行うが、埋没木は出現せず。

(13) 平成10年11月14日

地中レーダー探査をあきらめ、引き続き昭和58年に圃場整備をした土木業者の記憶をたよりに、エリアを拡大して発掘調査を実施。小豆原川の土手ぎわで1本のスギと思われる埋没木を発見。

(14) 平成10年11月20日

発見した埋もれ木の近くで、ボーリング調査を実施。これにより、10mほどの幹を持つ巨木が埋没していることを確認。



写真2-3 最初に発見した埋没木(A-1)とボーリング調査風景

(15) 平成10年12月23日

埋没木の存在が予想される水田4,500㎡について、表土を搬出した後2mほど掘削し埋没木調査を実施。これにより、新たにスギが7本、トチノキが1本出土し、この水田を中心とした約500㎡のエリアにスギ11本、トチノキ1本の計12本が埋没しており、埋没林であることを確認する。松井氏などと相談し、以後、この埋没林を「三瓶小豆原埋没林」と呼ぶこととする。

(16) 平成10年12月

埋没木の調査及び保存方法や掘り出し方法等について検討開始。松井氏の他、島根大学徳岡隆夫教授等の協力のもとに検討。併せ埋没林の名称を決定(三瓶火山に起因する埋没林を「三瓶埋没林」

小豆原地区で発見された埋没林を「三瓶小豆原埋没林」に)。また、木材の保存処理方法等については、奈良県林業試験場の酒井技師の協力を得る。

(17) 平成11年1月5～6日

国立歴史民族博物館の辻 誠一朗助教授に現地調査を依頼。各種の助言を得ると共に、全国各地の埋没林についての情報を得る。

この他、文化財調査コンサルタント(株)の渡邊正巳氏に埋没林の樹種調査、ボーリングコアからの花粉分析の可能性調査等を依頼。

(18) 平成11年1月18日

大阪市自然史博物館館長那須孝悌氏、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター発掘技術研究室室長光谷拓実氏に現地調査を依頼。各種の助言を得ると共に、埋没林の年輪年代調査のためのサンプル採取を行う。

(19) 平成11年1月11日

景観自然課が大田市に発見状況について報告すると共に、大田市の意向聴取や今後の対応策等について協議。

(20) 平成11年1月25日

三瓶小豆原埋没林の発見について、知事が記者会見で公表。お昼のニュースで大きく報道される。以後、現地保存監視のため、景観自然課職員が常駐体制をとる。

(21) 平成11年1月29日

大田市三瓶町小豆原地区において、地元住民への説明会を開催。

(22) 平成11年1月30日

現地の一般公開と現地説明会を開催、約500人が訪れる。

(23) 平成11年2月22日

土地所有者や地元の協力により、埋没林掘り出し水田4,655㎡を県が買収。また、三瓶小豆原埋没林に関する緊急調査を開始する。

(24) 平成11年3月10日

第2回目の現地一般公開を実施、約350人が訪れる。

(25) 平成11年3月29日

第1回「三瓶埋没林調査保存検討委員会」開催

委員7名で構成、委員長に大阪市立自然史博物館館長那須孝悌氏が就任。今後の調査のあり方、保存方法及び活用方法について検討する。

(26) 平成11年7月12日

大田市三瓶町小豆原地区において、地元住民への説明会を開催(第2回)

(27) 平成11年8月11日

第2回「三瓶埋没林調査保存検討委員会」開催

10mを超える長大な幹を有する巨木の埋没林は他に類例がなく、かつ保存状態も非常によい等日



写真2-4 第1回一般公開風景(平成11年1月30日)

本一の埋没林であると言っても過言ではないことを確認。掘り出し工事の方法（A-5鋼管矢板工法、A-9矢板工法）について、及びポリエチレングリコールを使った保存処理法についての方針を確認。併せ、保存処理分野の新委員に次回から参画してもらう旨を決定。また、各種の調査のあり方についても検討し、県が行う調査、検討委員が行う調査及びそれ以外の形で行う調査等のやり方等について検討。この結果に基づき第一次学術調査をスタートさせる。

(28) 平成11年8月30日

大田市三瓶町小豆原地区において、地元住民への説明会を開催（第3回）

(29) 平成11年9月5日

第3回一般公開と現地説明会を開催。約170人が訪れる。A-9付近を3m程度掘り下げた状態。俳優で三瓶自然館名誉館長の柳生博氏も参加。



(30) 平成11年11月6日

第4回一般公開と現地説明会を開催。約420人が訪れる。A-1.2.3.4.9.10付近を6m程度掘り下げ、林立した状態を公開。

写真2-5 第4回一般公開風景（平成11年11月6日）

(31) 平成11年11月20日

第3回「三瓶埋没林調査保存検討委員会」開催、午前中に現地調査を行う。（A-9の掘り出し工事中）。保存分野で新委員に奈良国立文化財研究所の高妻洋成主任研究官が就任、A-5掘り出し工事方法確認、保存処理スケジュール、調査方針の確認。

(32) 平成11年12月1日

A-9のプール保存処理を行うためクレーン移動する。（高さ約5m、重量約10t）

これから平成13年9月頃まで処理を行う。

(33) 平成12年1月26日

三瓶小豆原埋没林現地4,251㎡（下側の水田）を県が取得。

(34) 平成12年3月14日

第4回「三瓶埋没林調査保存検討委員会」開催、三瓶埋没林調査報告書（平成10～11年度概報）等について検討。



写真2-6 第4回三瓶埋没林調査保存検討委員会